なのはな通信

（仮　題）　第1号　1998.12

編集・発行
勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174　千葉県流山市下花輪409
TEL 0471-58-9955　FAX 0471-59-7055
発行責任者　小澤　清子

発刊にあたって

学校長　石田　一宏

本校の1科一期生、2科一期生とニ期生がすでに卒業して、今、あちこちの医療の現場で働いています。早いもので、本校も四年目を迎えたわけです。

去る十月三、四日には四回目の学校祭「東葛祭」が、とても楽しく無事おわりました。

学年集団をひとつずつみると、その雰囲気は微妙にちがうのですが、このような学校祭などをとおしてみると、本校の校風もできつつあることを感じられます。

この九月には学生自治会も結成されました。学ぶ主体である学生たちが、ひとりひとりの個性を大切にしながら、かつ、力を合わせてみんなの校風づくりに参加してくれるとうれしいと思っています。

本校は、一九九五年四月設立当時から全国の民医連組織のさまざまな支援をうけ、また地域の患者さん、共同組織の方々をはじめとする多くの人々のご協力をいただいて教育内容をゆたかにしてきました。講師の先生方も、本校の教育理念にご賛同いただき、教育実践の面で多くのご努力をいただいております。本校は、首都圏民医連の唯一の看護学校にふさわしく、地域とともにあり、患者の立場に立った内容のしっかりした教育をめざしております。

今成長しつつある東葛看護学校の様子を知っていただき、その上で一層のお力ぞえをいただきたく、このたび「学校報」を発行することとなりました。学校とみなさまとのパイプ役になってくれることを期待しております。

1998年度教育活動

主な学校行事、教育活動は次の通りです。

1998年度教育活動（4月～11月）

	学校行事	1科1年（4期生）	1科2年（3期生）	1科3年（2期生）	2科1年（4期生）	2科2年（3期生）
4月	6日始業 11日第4回入学式 1科36名 2科36名 14日防災訓練	23日病院探検	8日地域フィールド発表	27～6/19日各論Ⅳ実習	20～21日合宿研修	
5月		8日病院探検発表 22日地域患者訪問				25～9/25各論実習
6月	5日第4回体育祭	8日地域患者訪問発表 15～17日基礎Ⅰ実習	12日生命活動発表 22～7/9各論Ⅰ実習			
7月	3日千葉県看護学学生体育祭 25～8/23日 夏期休暇	17日基礎Ⅰ実習 発表	23日各論Ⅰ実習ゼミナール	13日各論Ⅳ実習発表	24日地域フィールド発表	
8月	24日始業			25～9/11日各論Ⅴ実習		
9月	4日防災訓練		7～25日各論Ⅱ実習			
10月	3～4日第4回東葛祭	26～30日基礎Ⅱ実習	12～30日各論Ⅱ実習	6～10日研修旅行 19日生命活動発表 21日各論Ⅴ実習発表	26日生命活動発表	19～21日研修旅行 30日研修旅行発表
11月		24日基礎Ⅱ実習発表	13日各論Ⅱ実習ゼミナール 16～12/25日各論Ⅲ実習	2～27日総合実習	10/27～11/13基礎実習	10～17日各論ゼミナール

今後の予定

	学校行事	1科1年（4期生）	1科2年（3期生）	1科3年（2期生）	2科1年（4期生）	2科2年（3期生）
12月	4日県下看学生研究発表 5日第4回キャッピングセレモニー 26～1/10日冬期休暇			15～18日総合実習発表		11/24～12/12総合実習 15～18日総合実習発表
1月	11日始業 20～21日1科Ⅰ期入学試験	25～2/12日基礎Ⅲ実習	22日各論Ⅲ実習発表		19日基礎実習シンポジウム	
2月	9～10日 2科入学試験		16～18日地域フィールド	28日看護婦国家試験		28日看護婦国家試験
3月	6日第3回卒業式 9～10日 1科Ⅱ期入学試験 13～4/4日春期休暇	11日基礎Ⅲ実習発表				

学生自治会発足

私達、勤医会東葛看護専門学校自治会は、九月四日に設立する事が出来ました。自治会発足にあたり、三本柱の方針を立てました。

一、「自分達の学校」をより良くしていくとともに、学生相互の交流と団結を目指す。

二、学生の切実な要求と発展及び実現する為に、学生一人一人の意見を集約し要請する。

三、自主的・民主的な文化・スポーツ活動の発展を目指す。

この方針を立てた目的としては、学校の方針である「学生が主役の学校」を元に、開校四年目の我が校をさらに充実したより良い学校にして行きたいという目的です。

活動については、まだ設立して間もないのですが、先日奨学金改定の問題に立ち上がり学生を初め、保護者の皆様からも署名をいただく事が出来、二四八名の署名の要望書を千葉県庁へ行き提出、申し入れを行いました。この奨学金改定の問題にも、一生懸命に取り組んでいたものの、いい返事は返って来ませんでした。学生にアンケートを取り生の声を伝えに行っても県は「返せないなら、借りなければいい」「大きい病院にこだわらず小さな病院に勤めればいいのでは」などと、国のいいなりの冷たい態度で終わらされてしまいました。

さらに力を入れて頑張りたいと思います。

1998年度自治会役員の面々

まだ設立して三ヶ月余りで、頼りない自治会ですが、学校生活の問題・学生の意見・また、学校周囲の問題にも勧んで参加し、積極的に取り組んで、皆さんの頼りになれる自治会にして行きたいと思います。よろしくお願いします。

修学資金の返済改悪反対を千葉県に申し入れる自治会役員

1998年度　自治会役員紹介

役　員

会　　長：清水宣行（1-1）
副 会 長：福野美由紀（1-2）
　　橋本麻由・磯野あいみ（2-1）
書　　記：高橋誠一（1-3）
　　蓮場隆代・吉田拓生（1-1）
会　　計：広瀬明子（2-1）
　　菅野桂子（1-1）
会計監査：小林久美子（1-2）

クラス代表委員会

（クラス長）	（副クラス長）
1-1　蓮場隆代	1-1　高橋麻衣子
1-2　千葉 静	1-2　池田直子
1-3　川口郁代	1-3　山岸真奈美
2-1　日高孝子	清水幸子
2-2　瀬崎由美子	2-1　松村 香
	阿部愛子
	2-2　伊澤真弓

看護1科2年生（3回生）

生命活動の学び

看護第1科では、二学年に進級すると、早速に「生命活動」の学習に入ります。

人間は「人間の生命をつかさどるしくみと健康に生きようとする力」を生まれ持っています。「生命活動」とは、このような人間の生命運動を総合的視点で学びます。

以下「人間誕生」グループの学びの一端を紹介します。

人間が誕生するのは一つづつの細胞である精子と卵子の出会いから始まる。人間が誕生する以前に地球が誕生し、海が誕生し、そして一つの生命体が生まれた。その生命体は生物の単位である細胞をつくりだし、様々な生物へと進化していった。こうして、百五十億年かけて人間は誕生した。このように、百五十億年という気の遠くなるような時が続いて、私たち人間は存在しているのだとわかった。

生命活動を通して学んでいく中で、いつの時点をもって「人間誕生」とするか「人間」って何？という疑問がでてきた。生まれたばかりの赤ちゃんは成人の私たちと比べると機能の面で未熟な部分が多い。では、赤ちゃんは人間ではないのだろうか。人間から生まれ、四十六本の遺伝子をもつ赤ちゃんは誕生した時点で生物学的に言えば、間違いなく人間だと思う。しかし、オオカミ少女のようにオオカミに育てられた人間はオオカミの様になってしまい、人間とはいいがたい。

そこで、私たちは「人間らしい人間」という視点でさらに話し合ってみた。人間は生まれると、どんどん成長・発達を続けていく。生まれたばかりは未熟だった脳も、成長・発達を続け、十八歳から二十歳頃には完成するそうだ。でも、それで人間は終わりではない。人間には学習能力というものがあり、それは一生発達し続けるということだ。人間は生きていく中で、周りの環境から様々な影響を受け、多くの経験をしていく。年を重ねていくごとに人間味豊かになっていくのではないかと私たちは考えた。

このように考え話し合っていくと、八つの糸が結びついてきた。一人の人間が誕生することで、消化器系、骨・筋肉系、循環器系、呼吸器系、内分泌系、脳神経系、免疫系という人間の体の中でおこる生命活動がはじまる。そして、人間が人間らしく生きていくためには、八つの系の仕組みがちゃんと働き、健康に過ごせることが必要なんだと考えた。

この「生命活動」の取り組みは、1年次の学習の到達点としている「患者さんの事実を捉えるとは何か」に端を発しています。そして「生命活動」の学習以後に始まる「各論実習」においての「人間の健康に生きる力」が障害された状態としての―病態―を理解する土台としています。さらに、その状態―人間の自然治癒力とそれを応援する治療としての学習―を深め、2年次の獲得目標である「患者さんの事実を生き生きと捉える観察力を育てる」の柱になっています。

「生命活動」は、看護婦・士として、正しい知識と正確な事実を基に展開される看護行為―目的と意義のある看護計画と実践―に生かされるものとも言えます。

学生たちは、あらゆる資料から、参考・引用し、平面的でない、立体的な人間の生命のしくみをオリジナルな構成のレポートにすることによって実習・机上の学習に生かしています。「生命活動」の目的にもある、自主的に学ぶということ、物事を相手にわかりやすく説明するためには自分もそれがしっかりわかっていないと出来ないということを、この「生命活動」をきっかけとして学習しています。

（1科二年副担任　熊谷　真澄）

看護２科１年生（４回生）

地域フィールド・ワークでの学び

四月２科四期生三十六名は、医療、看護の学びを深めたいと決意新に入学してきた。

医療現場で労働をくぐり学びにきた学生。新卒の学生。男性二人を混じえた平均年令二十五歳の多彩な顔ぶれでスタートした。

入学して早々一泊二日の「合宿研修」を行った。「地域の患者さんの生の声から、人生、健康、医療についてお話をお聞し看護について考えていこう」というテーマで、地域の患者さんのお宅を訪問してきた。五十年間くつ屋を営み地域の自治会で貢献してきたゴルフ大好きな患者さん、右手の不自由さを乗り越え目標に向かって頑張る学生大好きな患者さん達から多くの学びを得た。又仲間づくりの第一歩でもあり、全員で役割を持ち、リーダー集団を中心に組織づくりをし助け合って、みごとに成功させることができた。学生は、この合宿研修で事実からの学びの大きな一歩を踏み出した。

合宿研修を土台に6月「地域フィールド」の学びがスタートした。「住民にとっての地方行政と地域医療、看護の役割について考える」というテーマで患者さんのお宅や労働の場に行った。人々が健康で文化的な生活を営む権利を実現する地域とは何か、患者さんの実態や目的意識的に地域づくりを考えている人達に学び考え患者さんや地域の方々の応援で学生が成長していることを実感した。また、学生は、初めてのグループワークだったが、仲間と共に学ぶことで、自分達の学びが広がるということを学んでいた。各グループの学びを一部紹介する。

1Ｇ／流山民主商工会の歴史と活動会員の方々の労働実態と健康問題

現在の経済不況のもと中小企業の実態を知るため配線工事店、ラーメン屋、美容室、建具ガラス店を訪問した。銀行の貸ししぶりやリストラなどの実態、客足が減っている実態、生活ができず病院にもかかれないなどの生の声から中小企業の人達が人間らしい生活を営む権利が保障されていないことを知る。そして、患者さんの病気が深く労働と結びついていることを学ぶ。

2Ｇ／「田沼裁判」の歴史的意義

進行性核上性麻痺と診断された田沼肇氏が東京都を相手に重度心身障害手当受権資格認定に関する異議申し立てを行った裁判で基本的人権を社会的に明らかにするという歴史的意義を考えた。十年間の裁判にかかわる文献学習、田沼宅の訪問から、二人の頑張りを知る。「生きるということは生かされるということとは違う。人間愛で夫の介護を行っている」という祥子さんの言葉、肇さんのツヤツヤした笑顔を見て、この裁判は、田沼氏だけの裁判ではなく社会保障の闘として歴史的意義があることを学び、他の学生や知人に訴え署名を集め応援した。

3Ｇ／「在宅医療」の実態と「介護保険」

骨髄損傷で寝たきりの患者さん、在宅脊髄O_2療法の患者さん宅に訪問した。患者さんは、病気と闘い希望や楽しみをもって家族と共に頑張っている。患者さんの生活史から、懸命に病気と闘いながらの生き様を聞く。「早く病気のことがわかっていたら」の生の声に健診や疾病教育の問題を考えさせられた。又、介護保険が導入されると、今までの二倍以上も費用がかかり、家族の負担はそのままということがわかり問題意識へとつながった。

4Ｇ／現代史、戦後日本の歴史、経済と糖尿病

糖尿病から視力障害となった元タクシー運転手の患者さんの過剰な労働とストレスの関係を科学的に学ぶ。又日本の経済、医療の歴史を知り、患者さんの自己責任で病気をひきおこしたのではないことを学ぶ。患者さんが、社交ダンスが好きだと、ふらつきながらも学生とジルバを踊る姿に学生は感動した。

5Ｇ／デイケアの社会的役割

東葛病院のデイケアの利用者は八五名。柏市等の市外からも通っていることを知る。最高年齢九十八歳の女性がハキハキと語り、元気に交流する姿にデイケアに通所することで、社会的交流ができ、文化を楽しむことができる。デイケアは、利用者や家族にとって必要なのだと実感する。

（２科一年担任　松原　郁子）

原水爆禁止'98 世界大会に参加して

一九九五年に被爆地広島で行われた原水爆禁止世界大会に一期生は初めて参加しました。そこで被爆者の体験を知り、「一発で自分達と同じ人間がたくさん殺されてしまう核兵器を無くさなくてはならないと思いました。この世界大会参加後、一人一人の人間の命を大切に考えられる看護婦・士や一人の社会人になる為に、これからも核兵器や戦争を無くす運動を続けていきたいと「平和ゼミ」サークルをつくりました。平和ゼミでは全ての活動においてゼミ員だけでなく、学生、病院職員、地域の方々の多大な協力、参加を得ながら、あーでもない、こーでもないと試行錯誤を繰り返しながらやってきました。

一九九八年の世界大会に参加して、広島は商業の中心地、想像以上に大きな都市でした。平和公園を除けば五十三年前の広島を追体験できるようなものはなかった。原爆遺跡めぐりのガイドの人から「今残っている遺跡も難を逃れて五十三年間も残っているのではなく、残してきたんだ」との言葉はショックでした。世界遺産の原爆ドームの保存も、みんなで頑張って残してきたものでした。

世界大会と聞いて難しいイメージがあったが実際に参加してみて、わかった事や考えさせられた事がたくさんあり、学びが大きかった。原水禁のアピール署名を学校で訴えた時、「平和？」「核兵器廃絶？」そんな事よりバイトや勉強・・・もっと大事な事がある！人それぞれよ！興味なし！といろんな思いがある。平和ゼミの活動も「やりたい人達がやっている」と思われがちだがそうではないと否定したい。世の中で現在起こっている事、問題となっている事をとり上げ、学習したり共に学び合う事は大事だと思う。看護学生として忙しい学校生活でも「来てよかった」と思えるような企画を立て、みんなが気軽に参加できるように年間活動していきたい。夢のようだがすこしずつゼミの活動が広がったらいいと思う。

（1科三期生　梅林　芙由子）

県下体育祭

七月三日（金）千葉県総合運動場にて、千葉県看護学校親睦体育大会が開かれました。猛暑の中、親睦競技、バレーボール、バスケットボール、陸上競技で、県下看護学校一位の座を競い合いました。我が校の成績結果は、二十二校中十九位でした。

スタンドでは、ビニール袋を使っての大声援が聞かれました。陸上四〇〇mリレーでは、二チームとも準決勝進出を果たしました。バレーボール、バスケットボールでも、キラリと光る冴えたプレー、ボールにくらいつく粘り強いプレーが目立ちました。（1科3年　ニュース手と目より）

学生が学ぶ 主人公に

（1科教務主任　石倉啓子）

1科は今年の三月、一期生を送り出して一クールが終了しました。本校のひとつの時代が終った・・と感慨深いものがあります。それは「学生が学ぶ主人公になる」学校・「地域に開かれた」学校づくりをめざして、本校の歴史を切り開く三年間でした。学生と教員の育ちあいの三年間でもありました。―なにより教員自身が古い自分をのりこえ、新しい自分づくりへの挑戦の始まりでもあります。

患者の事実をつかむとは―そのことをとおして、また仲間との関係で自分づくりとは―人間としての発達を保障する教育はどうあったらいいのか・・年々変化する学生たちに学びながら、模索はつづきます。

今年九月四日学生自治会が発足しました。画期的です。新しい時代がこれから始まります。民主的な学校づくりに、ともに頑張っていきたいと思います。

ごくろうさまでした 退任教職員から一言

（前副校長　堀内洋子）

八月から、代々木病院の婦長室に異動になりました。みなさんの若やいだ、時には熱気を帯びた空気と声にかわって、代々木病院では目の前に迫った東館への引っ越しをどう成功させるか、議論の真っ最中でした。

看護婦さんをはじめ、全職員の大奮闘で引っ越しも九月二九、三〇日十月一日にかけて無事終わりました。

みなさんの先輩の七人も悩みながら患者さんとしっかり向き合ってがんばっています。

都心にある代々木病院の周辺でも、一歩路地裏に入るとひとり暮らしをしている高齢の方や、年金暮らしで病院になかなか受診できなかった方など、医療が充分に行き届かない実態があります。

来年度から、代々木病院でも臨床実習ができるように準備をすすめたいと思っています。

看学生のみなさんも健康に気をつけて明日に向かって前進してください。

（前1科専任教員　石垣好見）

私は初の教職につき1科一期生の担任となり、右往左往しながら、回りの先生方に助けられやって来たと思います。一期生は、何もないところから、歴史を築き上げていくという点では、学生と一緒に歩いて来たという思いが強いですね。心に残っているのは、「薬害エイズ」に対する運動ですね。自分たちの要求となり、社会と闘う力は、私にとってはスゴイという力強さを感じたものです。そして、薬害がもつ本当の意味はなんなのかも学習しました。歴史の上に立ち、社会と結び付いて今の私たちがいることを改めて感じました。これからも、社会の動きをきちんと見据え、医療人として、ひとりの人間として常に考えていきたいと思います。

（前2科専任教員　早尾真由美）

看護学校での三年間は、私の看護婦生活を大きく変える分岐点だったと思っています。臨床で七年看護婦として働く中で、『医療とは』『看護とは』何なのかじっくり考えたことはありませんでした。学生と同化してしまう事が多かった私は、学生との会話の中で色々考え学び、『医療とは』、『看護とは』についてじっくり考える機会を得る事ができました。学生と向き合う事で自分自身とも向き合う事になり、少し恥ずかしい様な感じもしましたが大きな感動でもありました。今は診療所に勤務していますが、患者と向き合いながら看護学校で学んだことを土台にさらに発展させていきたいと思います。

（前事務員　高崎有紀）

看護学生自治会発足おめでとうございます。

今年四月オホーツク勤医協北見病院に来て初めて現場の大変さ、厳しさ、事務の役割など学校で学んだ事が、やっと理解できたと思います。

民医連の「いつでも、どこでも、誰もが安心してかかれる病院」という考えに誇りを感じはじめていた時に昨年九月の医療改悪。「いつでも、どこでも、誰もが安心してかかれる病院」が、そうでなくなってしまった。それは気になる患者訪問や外来窓口でも感じます。

薬を飲む回数を減らしたり、来院するのを控えたり、年金が入るまで滞納させてほしいとか人様々です。

激変の時代に看護婦・士への道を歩んでいる皆さんに、心から期待とエールを送ります。

自治会運動の発展を目指してガンバッテ下さい。

よろしく
新任教職員紹介

（副校長　小澤　清子）

当校から見る夕焼けは、延々と続く江戸川土手で遮るものがない為、大変美しい。1科三年生の各論Ⅳ実習おつかれさま会の時は、電気を消して真っ赤に染まった空を、しばしみんなで眺めたほどです。

国連の子どもの権利委員会は、日本の教育は過度に競争的だと批判していますが、そんな「受験体制」「能力主義」的教育政策の中で高校まで過ごしてきた若者達、又、医療切り捨て政策のもとでの看護経験をもつ中堅からベテランの、中には子育て真っ最中の学生達が「看護学」を学んでいます。

当校の教育理念に沿って、民主的で人間性豊かな看護の専門家として、羽ばたいて行けるよう勉学条件を整え、同じ時代を生きるものとして、一緒に学んでいきたいと思います。

（管理部長　伊藤　淳）

六三億三〇〇万円。全国の民間立看護学校八八〇校への運営補助金総額です。国の補助金見直しを理由に前年より二億八千万円の減額。何とも腑に落ちません。同じ民間の、それも失策によって穴をあけた銀行には何兆円という「補助金」が出るのです。当校の運営には年間約二億円の費用がかかりますが、国と県の補助金は、その2割弱に過ぎず大半は学生とその家族、そして学校の設置者法人（東葛病院など）の負担となって重くのしかかっています。看護婦養成が国民生活向上の根幹に関わる大切な事業であることはもちろんのこと、患者さんの生命と、それをとりまく社会状況を学ぶ学生を支える学校運営を要として父母、実習病院のみなさまとの共同の運動を痛感しています。

（専任教員　熊谷かおる）

私は来年の四月から東葛看護専門学校で教員として働く予定で、現在看護教員養成講座に通っています。

八年ぶりの学生生活で、人間とは、健康とは、看護とは何かについて、夜遅くまでクラスメートと討論しています。もう一度基本にもどって看護を振り返る事は、自分自身を見つめ直すとてもよい機会になっています。同時に、教育について学び、看護教育の難しさと未熟な自分を痛感しています。又学ぶ事以上に、この学生生活の中で素敵な仲間に出逢えた事へ、感謝しています。苦しい時を一緒に助け合いながら過ごした仲間は、一生の宝だと思っています。

来年の四月からは皆さんにお逢いできる事、楽しみにしています。何ごとも一緒に学んでいこうと思っています。

学校通信のネーミング募集

第一号は、仮題「なのはな通信」で発行しました。年二回を目途に発行していきたいと思っています。

学生の皆さん、関係者の皆さま、次号までにふさわしいネーミングを待っています。締切は二月末とさせていただきます。

編集後記

暑い夏に「学校通信」発行の話がもちあがってから、ようやく第一号発行のはこびとなりました。四月に入学した第四期生もすっかり学校生活にとけこんで、1科一年生は待望のキャッピングセレモニーを迎えます。1科二年生は各論3実習中、2科一年生は基礎実習のシンポジウムにむけてレポート作成に取り組んでいます。1科三年生、2科二年生は沖縄研修旅行「日本国憲法と平和と医療」も無事終了し、看護学生生活の総まとめともいえる総合実習中です。

当校の加盟している民主医療機関連合会では、今、「要介護老人実態調査」に取り組んでいます。教職員も実習病院である東葛病院の患者さん宅を訪問しましたが、「この方は本当に在宅でよいのだろうか」「介護保険実施になったら、医療や介護を受けられるのだろうか」必要な人が必要な医療・介護が受けられるようにしなくてはと、痛感しています。

最後になりましたが、講師の先生方、臨地実習場の皆様、父母及び関係者の皆さまに感謝申し上げるとともに、二十一世紀の日本の看護を担うエッグナースに、今後も暖かい励ましをよろしくお願いします。

学校通信編集委員会
江島典子、二瓶幸江、小澤清子